

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和 8 年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第 6 号（9 月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401
南さつま市金峰町大野 2200
TEL:099-245-1081（代表）
099-245-1157（直通）
FAX:099-245-1149



テレホンサービス：099-296-6431
（7～9月）

ホームページアドレス：<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

- | | |
|--------------|---|
| 1. 使用する人の安全 | 使用者自身の健康管理、安全使用 |
| 2. 作物に対する安全 | 適期、適正防除で薬害防止 |
| 3. 農産物に対する安全 | 消費者へ安全な農産物を供給
（農薬安全使用基準の遵守） |
| 4. 環境に対する安全 | 周辺環境への影響防止
（周辺住民等への危被害防止）
（河川、湖沼、海等への汚染防止）
（養蚕、養蜂等への危被害防止） |
| 5. 保管管理の安全 | 保管管理の徹底で事故防止 |

農薬ラベルを確認しましょう

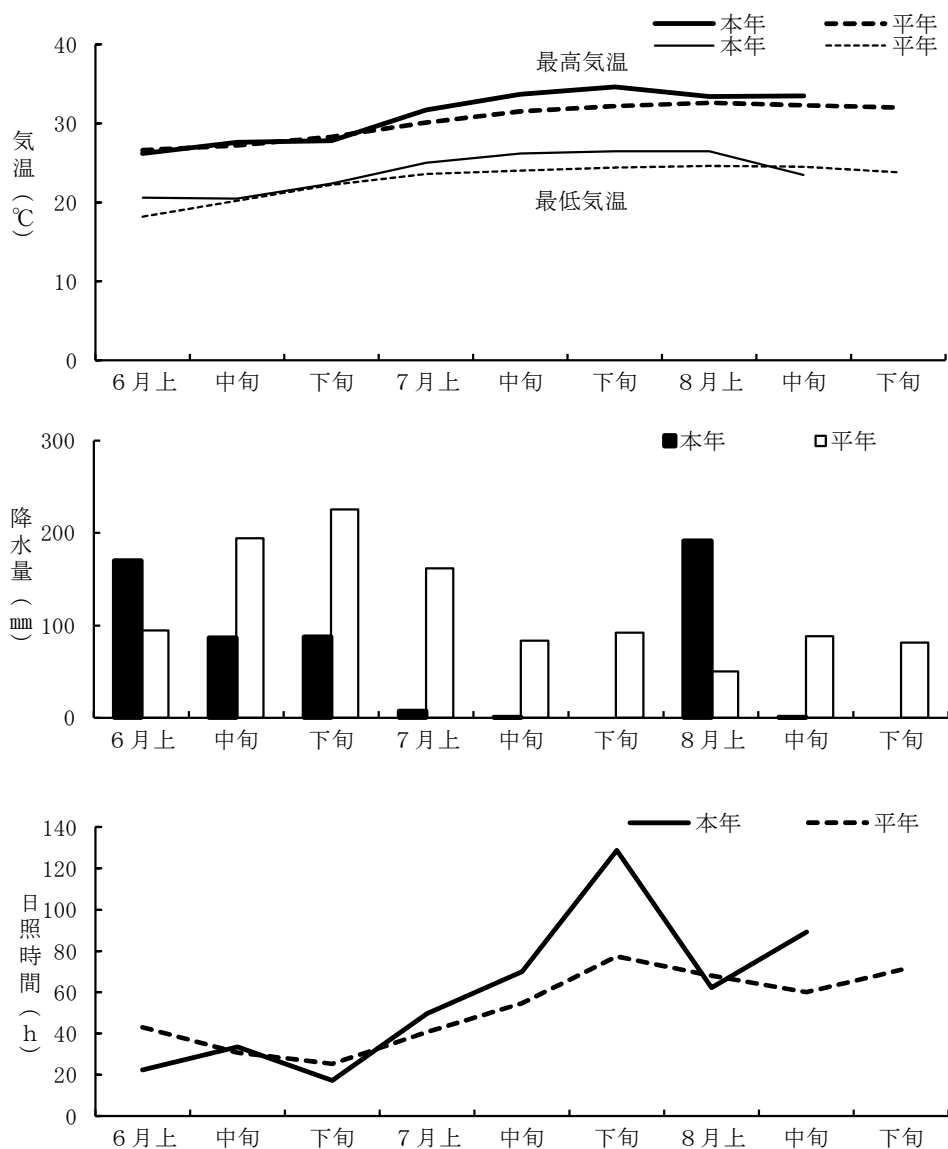
農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

【気象概況】

Ⅰ. 向こう1か月の予報（8月22日～9月21日） 令和8年8月20日 鹿児島地方気象台発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平 年 並	高い(多い)	
気 温	九 州 南 部 奄 美 地 方	1 0 4 0	3 0 4 0	6 0 2 0	九州南部の気温は高く、奄美地方は平年並みか低い。九州南部の降水量はほぼ平年並み、奄美地方は平年並みか多い。九州南部、奄美地方ともに日照時間はほぼ平年並みの見込み。
降 水 量	九 州 南 部 奄 美 地 方	3 0 2 0	4 0 4 0	3 0 4 0	
日照時間	九 州 南 部 奄 美 地 方	3 0 4 0	4 0 3 0	3 0 3 0	

Ⅱ. 6～8月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【 病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要 】

作 物		病 害 虫 名	発 生 量	
			現 況	予 報
普通作物	普通期水稻	いもち病（穂いもち）	少	少
		紋枯病	やや少	並
		トビイロウンカ	やや少	並
		コブノメイガ	多	多
		斑点米カメムシ類	並	並
	サツマイモ	ナカジロシタバ	並	並
野菜	イチゴ（苗床：子苗）	ハダニ類	多	多
	サトイモ	疫病	やや多	やや多
	根深ネギ	アザミウマ類	やや多	やや多
	野菜共通	ハスモンヨトウ	並	並
花き	キク（施設）	ハダニ類（県本土：施設）	やや少	並
		アザミウマ類（県本土：施設）	少	やや少
果樹	カンキツ	かいよう病（果実）（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	やや多	やや多
		黒点病（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	多	多
		〃（奄美地域）	やや多	やや多
茶樹	チャ	炭疽病	やや少	やや少
		新梢枯死症（輪斑病菌による）	少	少
		網もち病	やや少	やや少
		チャノコカクモンハマキ	やや少	やや少
		チャハマキ	並	並
		チャノホソガ	並	並
		チャノミドリヒメヨコバイ	多	多
		チャノキイロアザミウマ	並	並
		カンザワハダニ	多	多

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 普通期水稻

(1) いもち病（穂いもち）

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少

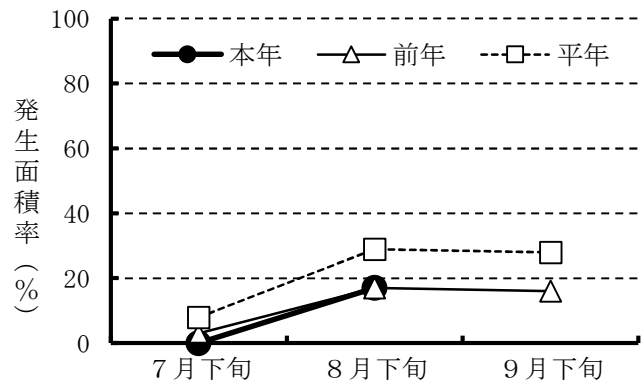
葉いもちの発生面積率 17%

(平成 29%)：低い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 粉剤または液剤による穂いもち防除は、穂ばらみ期～穂揃期に行う。

(イ) 山間部等のほ場では、葉に朝露が長く付着して、多発しやすくなるので発生を見落とさないようにする。



いもち病の発生面積率 (普通期水稻)

注) 7～8月は葉いもち、9月は穂いもち調査

(2) 紋枯病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生面積率 5% (平成 13%)

：やや低い

(イ) 気象予報

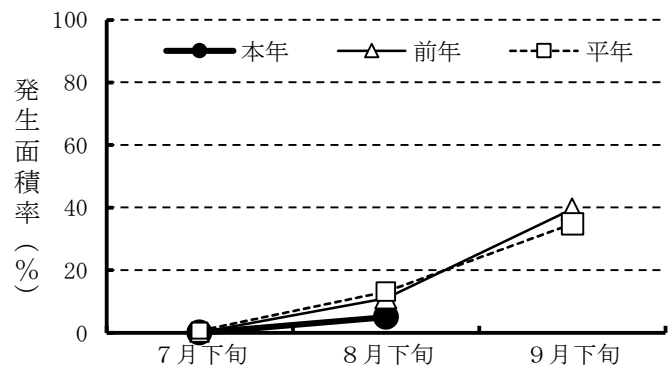
気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出穂後は、急激な上位部への病斑の進展をするので、予防散布に努める。

(イ) 粉剤または液剤による防除は、早生品種では出穂前 1 週間～出穂期、中晩生品種では出穂前 1～2 週間に行う。

(ウ) 昨年多発したほ場では、予防散布を徹底する。



紋枯病の発生面積率 (普通期水稻)

(3) トビイロウンカ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生面積率 2 % (平年 30 %)

：やや低い

(イ) 気象予報

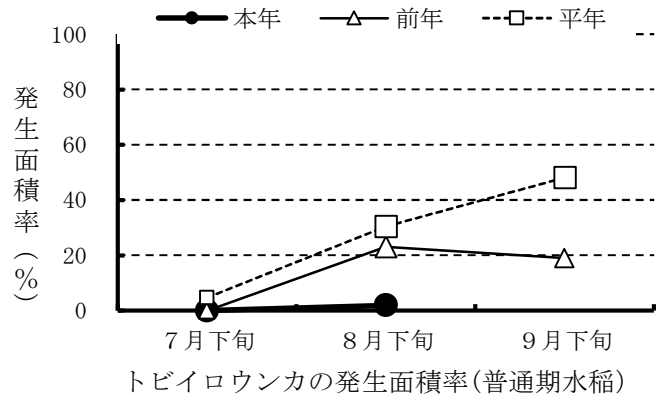
気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 防除適期は、7月20日の誘殺に由来する第2世代幼虫が9月3～7日頃、7月6日の誘殺に由来する第3世代幼虫が9月19～20日頃と予想される(図1)。

(イ) 本虫は稲の株元に生息するので、粉剤や液剤で防除する場合は、農薬が株元に十分届くように散布する。

(ウ) 発生状況は、地域やほ場によって異なり、同一ほ場内でもスポット的に発生するため、ほ場全体を観察し、本虫の発生を確認する。



(4) コブノメイガ (令和8年度注意報第4号、7月29日付け参照)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生面積率 100 % (平年 43 %)

：高い

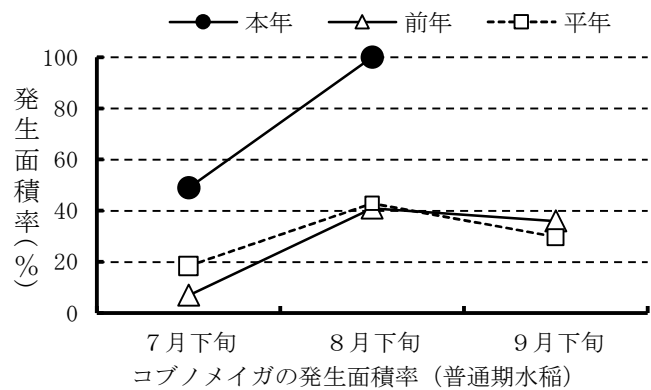
発生程度の高いほ場を認めた (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 粉剤または液剤による防除は発蛾

最盛日の7～10日後に散布する。

(イ) 7月23日の誘殺に由来する第2世代成虫の発蛾最盛日は8月24日頃と予測される(図2)。



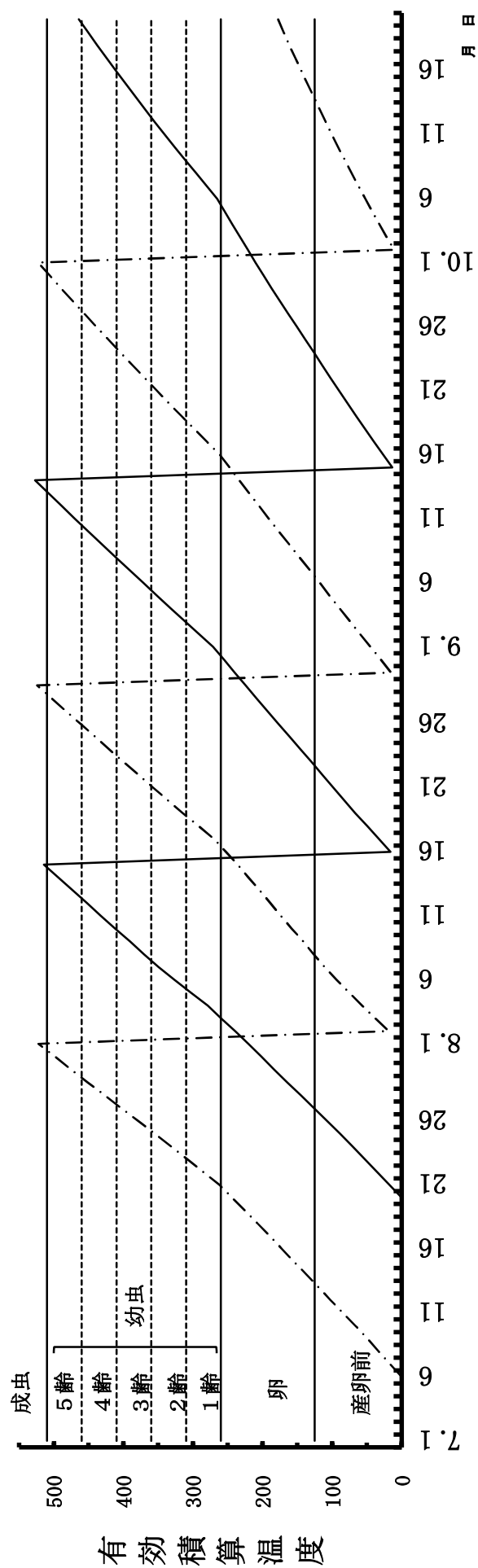


図1 トビロウソウカの有効積算温度による発生経過予測図（南さつま市金峰町）

注1）起算日：60W予察灯に多数誘殺された7月6日、7月20日

注2）気温：加世田のアメダスポイントを利用（8月20日以降は平年値）

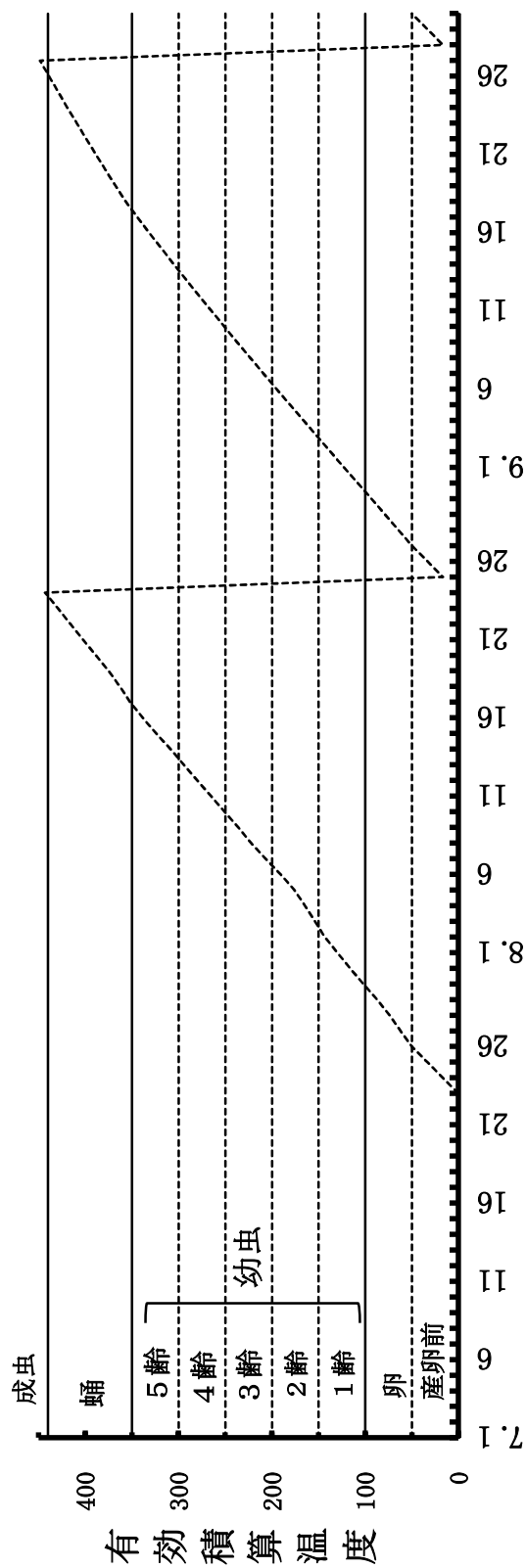


図2 コブノメイガの有効積算温度による発生経過予測（南さつま市金峰町）

注1）起算日：フェロモントラップにおいて多数誘殺された7月23日

注2）気温：図1と同じ

(5) 斑点米カメムシ類（令和8年度技術情報第14号、8月12日付け参照）



ア 予報内容

- （ア）発生地域 県本土
- （イ）発生時期 出穂期以降
- （ウ）発生量 並

イ 予報の根拠（普通期水稻周辺のイネ科雑草地調査）

（ア）調査結果 発生量：並

捕獲箇所率 66.7%（平年 78.5%）：低い

平均捕獲虫数 6.0 頭（平年 6.9 頭）：並

発生程度の高いほ場を認めた（＋）

（イ）県全体における斑点米カメムシ類の程度別発生箇所割合は、中程度以上が 17.6%（平年 20.9%）と平年よりやや低かった。

（ウ）種別構成比の割合は、ホソハリカメムシが 47.0%と最も高く、次いでアカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシの順に高かった。

ウ 防除上注意すべき事項

（ア）斑点米カメムシ類の防除は、穂揃期と穂揃期の 7～10 日後（乳熟後期）の 2 回防除が基本である。特に乳熟後期の幼虫の発生を見落とさないようにする。

2. サツマイモ

(1) ナカジロシタバ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 45% (平年 69%)

：やや低い

発生程度の高いほ場を認めた (+)

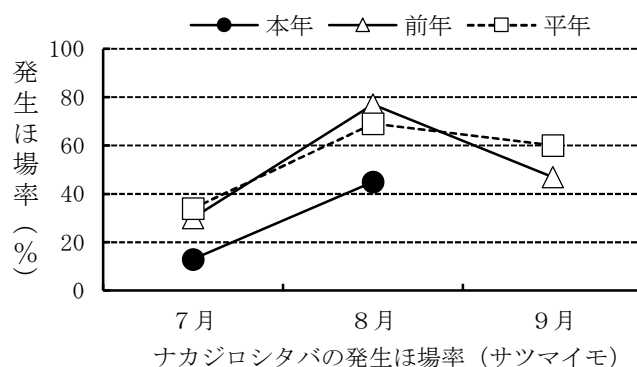
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 未展開葉での食害が認められ、若齢

幼虫が多くみられる時期に防除する。

(イ) 農薬散布後も幼虫の発生量が多い場合は、追加防除を行う。

(ウ) 老齢幼虫が多くなると食害の進展が急速に進むので、適期に防除する。



※被害葉面積率5%以下は発生無しとした。

防除に関する今月の留意事項

1. サツマイモ

(1) ヒルガオハモグリガ

ア 発生状況

(ア) 県内の一部ほ場で被害が発生しており (発生ほ場率 20%)、発生程度の高いほ場も認められる。

イ 防除上注意すべき事項

(ア) 幼虫の農薬に対する感受性は生育に伴って低下するので、若齢幼虫期の防除に努める。

(イ) 発生回数が多いため各虫態が混在しており、蛹に対する農薬の効果は劣るので、多発時は1週間おきに2~3回防除する。

(ウ) 農薬を散布する際は、収穫前日数を遵守する。

(エ) ジアミド系殺虫剤に効果の低下した地域が認められるので、使用する場合は散布後の効果を確認する (令和6年度技術情報第27号、令和7年2月21日付参照)。



Ⅱ. 野 菜

1. イチゴ（苗床）

（1）ハダニ類

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生量 多

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：多

発生ほ場率 82%（平成 44%）：高い

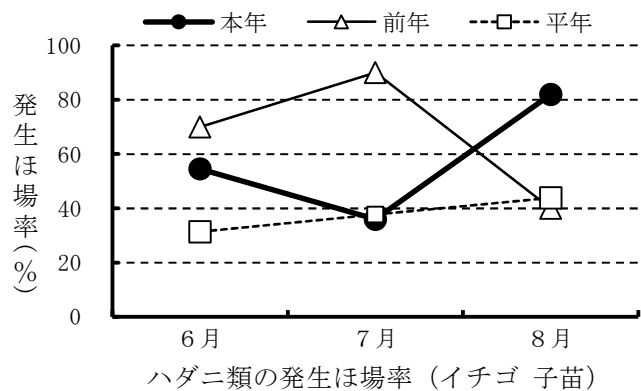
ウ 防除上注意すべき事項

（ア）管理作業時に注意深く観察し、早期防除に努める。

（イ）寄生葉や摘葉した葉は、ほ場外に持ち出し処分する。

（ウ）農薬の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから、薬液が葉裏までよく付着するように丁寧に散布する。

（エ）薬剤感受性の低下を防ぐため同一系統の農薬の連用を避け、気門封鎖剤など作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布に努める。



2. サトイモ

（1）疫病（令和 8 年度技術情報第 16 号、8 月 26 日付け参照）

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生量 やや多

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 70%（平成 61%）

：並

発生程度の高いほ場を認めた（+）

ウ 防除上注意すべき事項

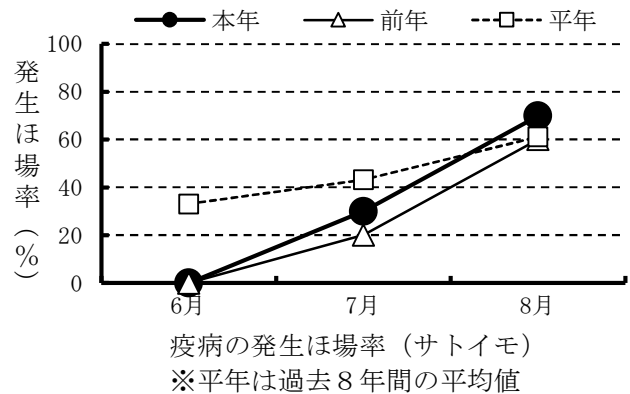
（ア）サトイモ生育後半の疫病の発生は、収量の影響は少ないものの、塊茎の腐敗を助長するため、安全使用基準を遵守し、適正な防除に努める。

（イ）発生ほ場では、直ちに治療効果のある

農薬を複数回散布する。また、未発生ほ場でも予防散布に努める。なお、防除体系の詳細については令和 3 年度普及情報(右二次元コード)を参照する。

（ウ）農薬散布後に葉が長時間濡れていると、薬害が発生する恐れがあるので、農薬は速やかに乾く時間帯を選んで散布する。

（エ）収穫後のくずいも・親いも等の残さは、ほ場や周囲に残ると発芽して翌年の発生源となるので、ほ場外へ持ち出し適正に処分する。また、茎葉等の残さは早めにすき込む。



3. 根深ネギ

(1) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率 50%

(平年：-%、前年：17%)

発生程度の高いほ場を認めた (+)

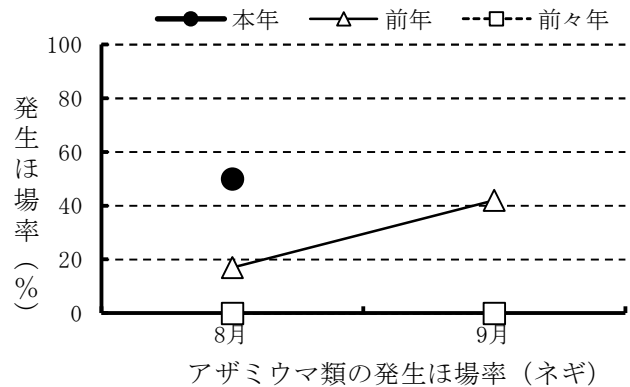
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 白いかすり状の食害痕の被害や青色粘着トラップへの誘殺から発生状況を確認し、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(ウ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。

(エ) 収穫後の残さは次作や周辺作物の発生源となるので、地上部に残らないよう処分を徹底する。



4. 野菜共通

(1) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 対象作物 イチゴ、サトイモ、根深ネギ等

(ウ) 発生量 並

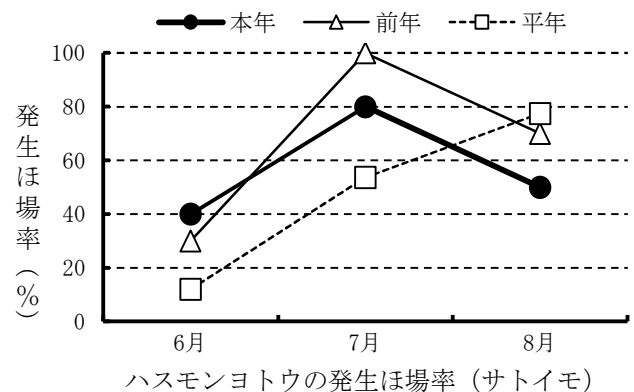
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

作物名	発生ほ場率 (%)		概評
	本年	平年	
イチゴ	9	12	並
サトイモ	50	78	並
根深ネギ	33	-	(並*)

※深ネギは令和6年度からの調査のため、前年比による概評を記載

発生程度の高いほ場を認めた (+) (サトイモ)



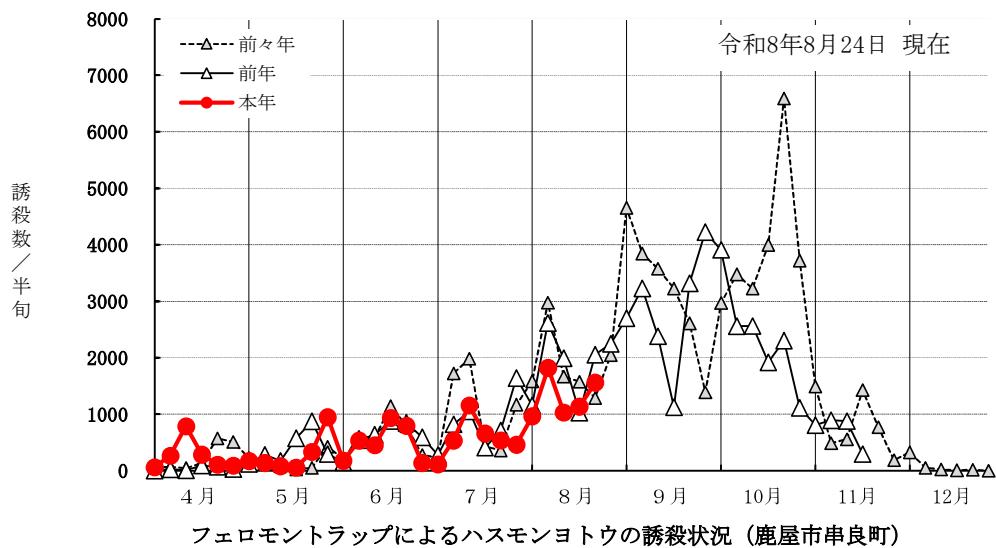
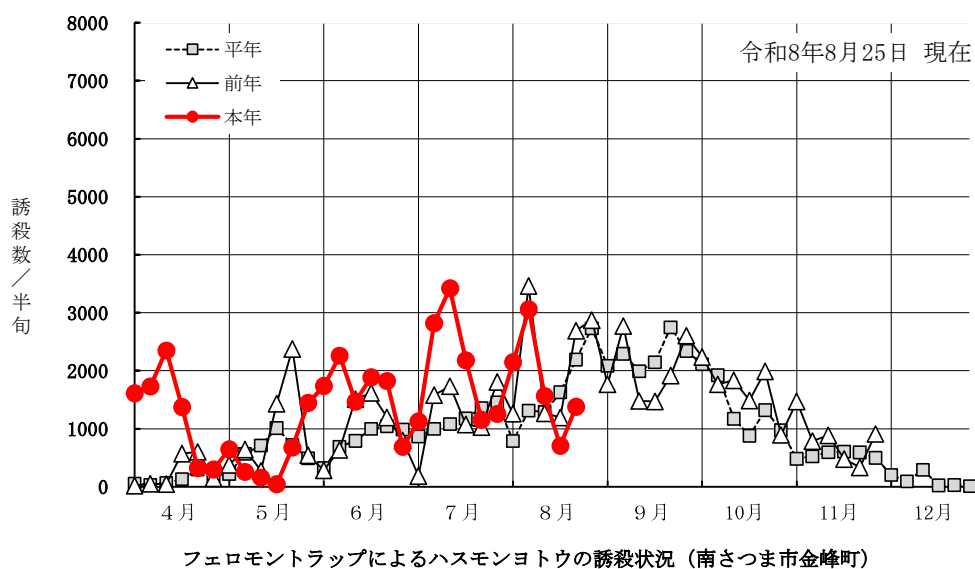
7～8月のフェロモントラップ総誘殺数：並～多

	南さつま市	鹿屋市
発生量	多	並
誘殺数（7月1半旬～8月4半旬）	19,458頭（平年11,966頭）	8,419頭（前年11,704頭）

※鹿屋市は2024年から調査地点を変更したため、前年比による概評を記載

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 若齢幼虫は集団で表皮を残して食害し、白変葉を生じるので、ほ場を見回り早期発見に努める。
- (イ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (ウ) 中・老齢幼虫になると農薬の効果が低下するので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。
- (エ) ジアミド系農薬に対して感受性低下が認められる。他の使用農薬も含め、散布後の効果を確認する。



Ⅲ. 花き

1. キク

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率 30%（平年 38%）
：やや低い

(イ) 気象予報

気温：高い（＋）

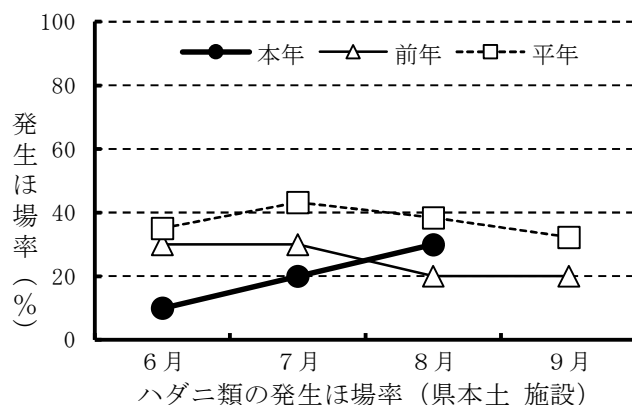
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する場合がありますので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏までよく付着するように散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率 20%（平年 38%）
：低い

(イ) 気象予報

気温：高い（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類（クロゲハナアザミウマを除く）の発生動向を把握するためには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。

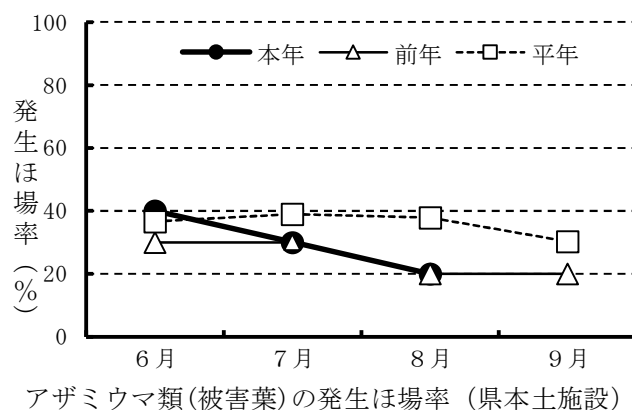
(イ) クロゲハナアザミウマは、主に中下位葉に寄生しているため、よく観察して早期発見に努め発生が認められた場合は、薬液が中下位葉の葉裏まで付着するよう丁寧に散布する。

(ウ) 作用性の異なる農薬（RAC コード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) アザミウマ類は、キクえそ病の病原ウイルス（TSWV）とキク茎えそ病の病原ウイルス（CSNV）を媒介するため、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。

(オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。

(カ) 母株や苗は導入時に、アザミウマ類の寄生やウイルス病の発生がないか確認し、持ち込まないようにする。



IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

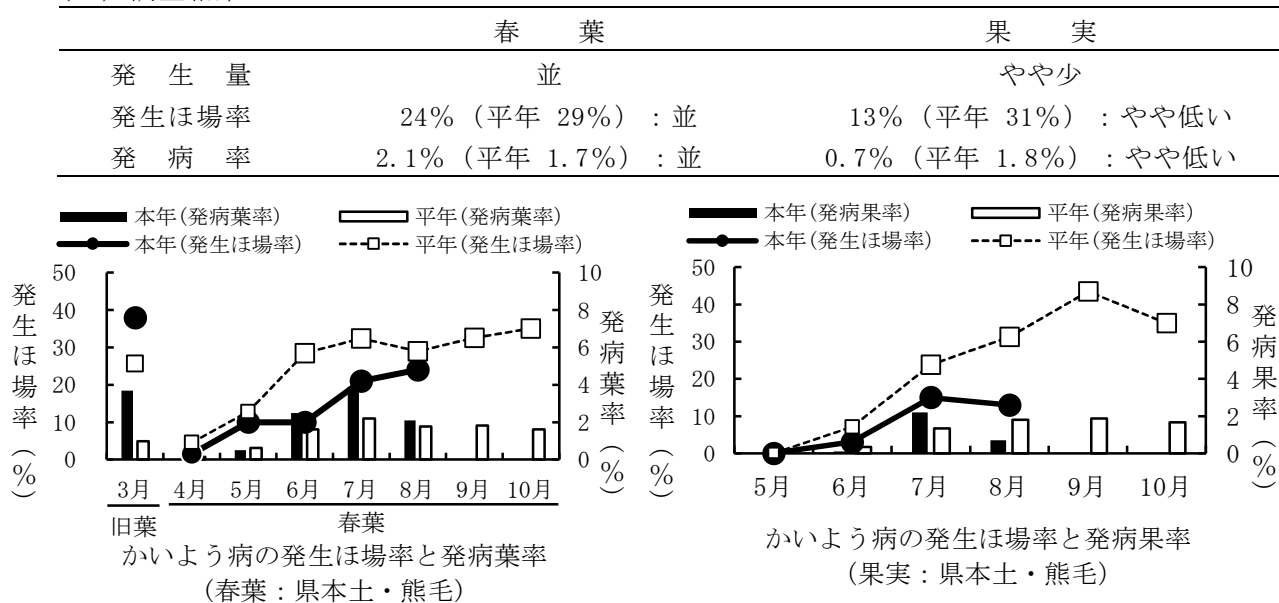
県本土・熊毛地域（果実） やや少

奄 美 地 域（果実） やや多

イ 予報の根拠

＜県本土・熊毛地域＞

(ア) 調査結果



＜奄美地域＞

(ア) 調査結果

	春 葉	果 実
発生量	並	やや多
発生ほ場率	0%（平成 0%）：並	29%（平成 10%）：高い
発病率	0%（平成 0%）：並	0.3%（平成 0.1%）：高い
		発生程度は低い（－）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 感染前の防除効果が高いので、強風雨等の襲来前には、予防散布に努める。

(イ) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除に努める。

(ウ) 強風雨等により葉や果実に生じた傷口から感染するので、防風ネットの設置や防風樹の管理に努める。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全地域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少

奄美地域 やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 17% (平年 37%) : やや低い

発病果率 3.5% (平年 7.0%) : やや低い

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや少

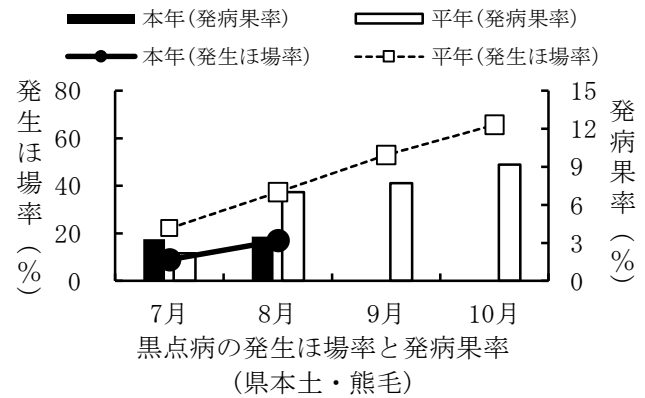
発生ほ場率 0% (平年 4%) : やや低い

発病果率 0% (平年 0.1%) : やや低い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 薬剤防除は累積降水量 200~250mm を目安とするが、近年、数日でこの雨量を超える場合が多い。薬剤散布間隔は気象情報に留意し、簡易雨量計等の園内設置により防除の目安とする。

(イ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 多

奄美地域 やや多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量：多

発生ほ場率 35% (平年 25%) : やや高い

寄生葉率 3.8% (平年 4.1%) : 並

発生程度の高いほ場を認めた (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 (春葉) 発生量：やや多

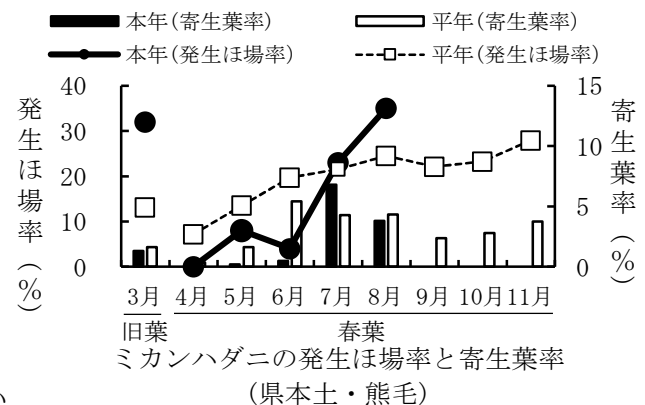
発生ほ場率 14% (平年 7%) : やや高い

寄生葉率 2.7% (平年 0.8%) : 高い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数 0.5~1.0頭 (寄生葉率で 30~40%) を目安に防除する。

(イ) 薬剤抵抗性を生じさせないため、同一系統、同一殺ダニ剤の使用は年1回とする。



防除に関する今月の留意事項

2. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類（ツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシ）

（令和8年度技術情報第15号、8月18日付け参照、右の二次元バーコード参照）



ア 果樹カメムシ類の予察灯での誘殺虫数は、8月下旬にかけて、出水市と南さつま市で、ツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシともに急激に増加し、平年よりも多い状況である。

最新の誘殺状況は、ホームページ

(<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujosho/trap.html>) を参照



イ 8月17～19日のヒノキ球果（餌植物）の口針鞘数（吸汁痕数）は、平年と同程度であるが、前年より多い。ヒノキ球果から離脱する口針鞘数の目安は25本/果であり、一部の地点では最大口針鞘数が25本/果に達した果実も認められている。また、一部の果樹園（カンキツ）への飛来が認められていることから、離脱が始まっている可能性がある。

ウ 本年のヒノキ球果の着果量は、平年よりやや多い。

(2) サビダニ類

ア 昨年多発したほ場では、発生するケースが多いので、防除に努める。

イ 秋季以降も果実上で加害し続けるので、被害果を認めたら直ちに防除する。

(3) 果実吸蛾類

果実吸蛾類は、果実を吸汁・加害し腐敗・落果させる。夜間に活動し、果皮の薄いカンキツに集まりやすい。

ア 幼虫の食草（アケビ、ムベ、アオツヅラフジ等）除去や夜間に成虫捕殺、防蛾網（7.5～10mm目）を設置する。

イ 恒久的な対策として、黄色忌避灯を主体とした集団点灯を行う。

V. 茶 樹

1. チャ

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

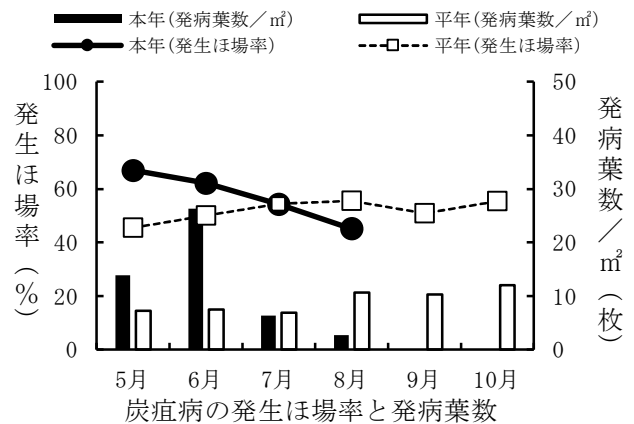
(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 45% (平年 56%)

: やや低い

1 m²当り病葉 2.7 枚 (平年 10.6 枚)

: 少



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 秋芽萌芽期～1葉期に予防剤を散布したほ場では、3～4葉期に治療剤を散布する。

(イ) 秋芽萌芽期～1葉期に予防剤を散布していないほ場では、2～4葉期に予防剤と治療剤の混用散布を行う。

(ウ) 伝染源の病葉が少ないほ場でも、長雨により多発する恐れがあるので防除を行う。

(2) 新梢枯死症 (輪斑病菌による)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 少

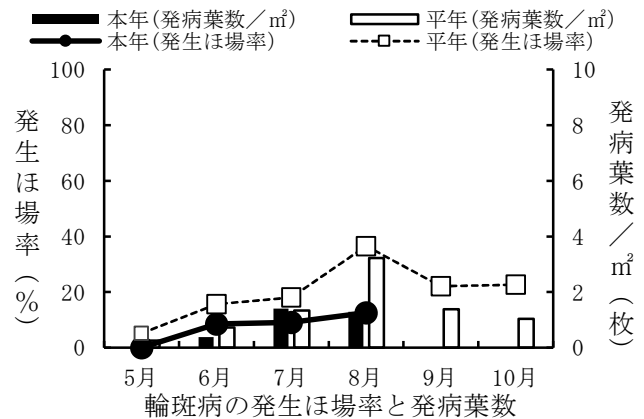
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量 (輪斑病) : 少

発生ほ場率 13% (平年 37%) : 低い

1 m²当り病葉数 1.3 枚 (平年 3.2 枚)

: やや少



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 二・三番茶摘採残葉に輪斑病の発生が多く、秋芽萌芽期～3葉期に降雨が多いと多発する。

(イ) 炭疽病との同時防除が可能である。

(3) 網もち病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0% (平年 1%) : やや低い

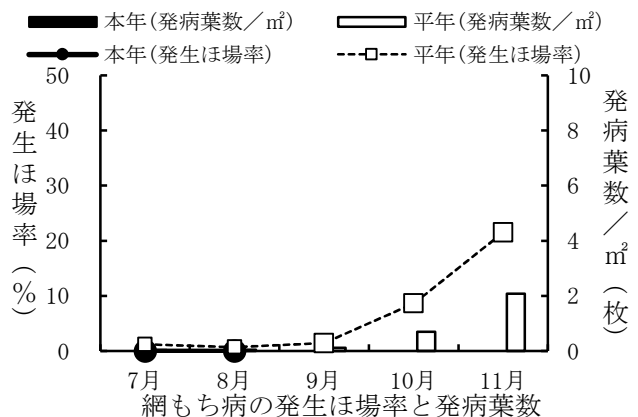
1 m²当りの病葉数 0 枚 (平年 0 枚) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 本病の感染は新葉に限られ、秋芽生育期に多湿条件が続くと多発する。

(イ) 更新園であっても周辺に発生源があると多発するおそれがあるので防除を行う。

(ウ) 常発園では、3～4葉期の防除に加えて、9月上旬にも銅剤等で防除を行う。



(4) チャノコカクモンハマキ、チャハマキ

ア 予報内容

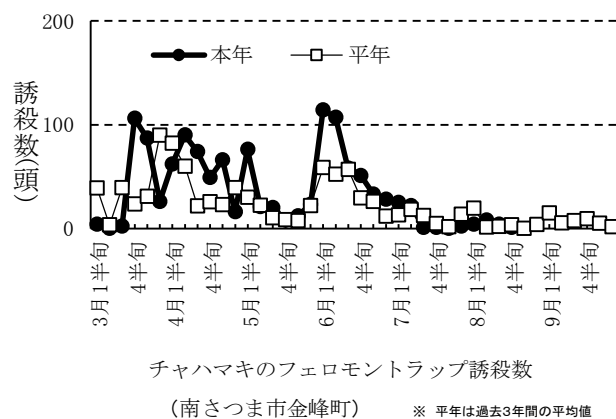
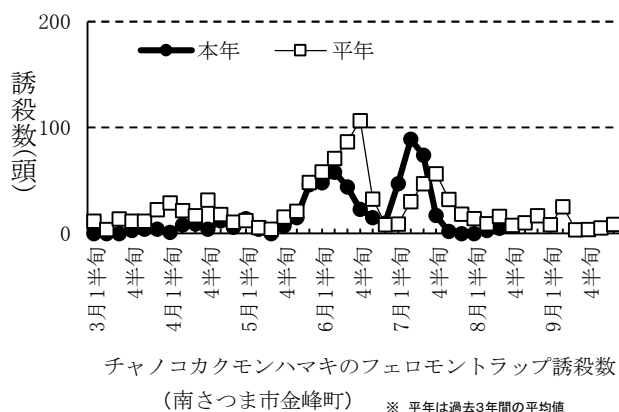
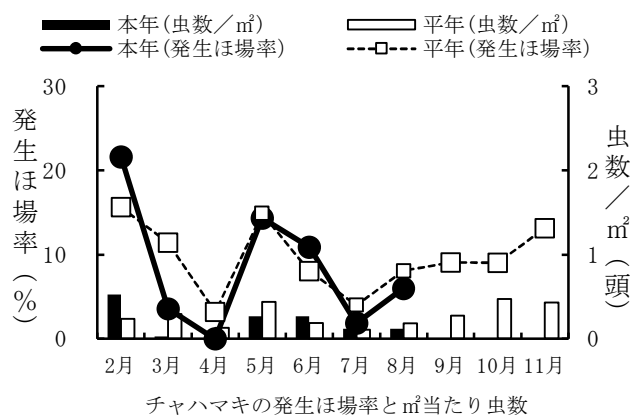
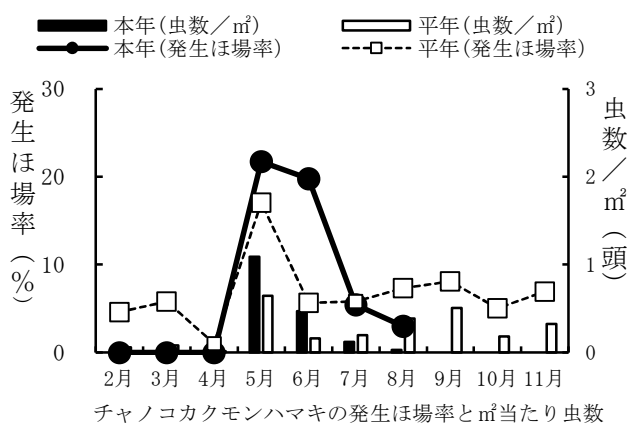
(ア) 発生地域	県本土
(イ) 発生量	チャノコカクモンハマキ やや少 チャハマキ 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発生量	やや少	並
発生ほ場率	3 % (平年 7 %) : やや低い	6 % (平年 8 %) : 並
m ² 当り虫数	0 頭 (平年 0.4 頭) : やや少	0.1 頭 (平年 0.2 頭) : 並
【フェロモントラップ調査】		
誘殺数* (7月4半旬~8月4半旬)	34頭 (平年153頭)	20頭 (平年44頭)

* 平年は過去3年間の平均値



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生量・発生時期は地域間差があるので、フェロモントラップ等で発生状況を把握する。
- (イ) 農薬による防除適期は、ふ化～2 齢期（発蛾最盛日の 10～15 日後）である。
- (ウ) ジアミド系農薬に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(5) チャノホソガ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

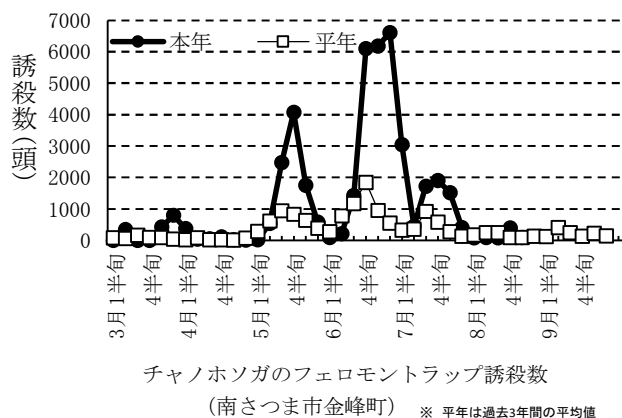
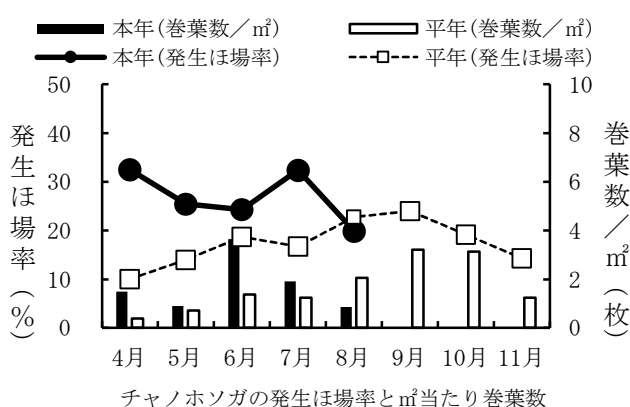
【巡回調査】

発生ほ場率 20% (平年 23%) : 並

m²当たり巻葉数 0.9 枚 (平年 2.1 枚) : やや少

【フェロモントラップ調査】

誘殺数 (8月1半旬~8月4半旬) 655 頭 (平年 740 頭) * 平年は過去3年間の平均値



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 巻葉してからの防除は効果が劣るので、秋芽萌芽～3葉期にチャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマと同時防除を行う。

(イ) IGR 剤及びジアミド系農薬に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦従って農薬を選択する。

(6) チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ

ア 予報内容

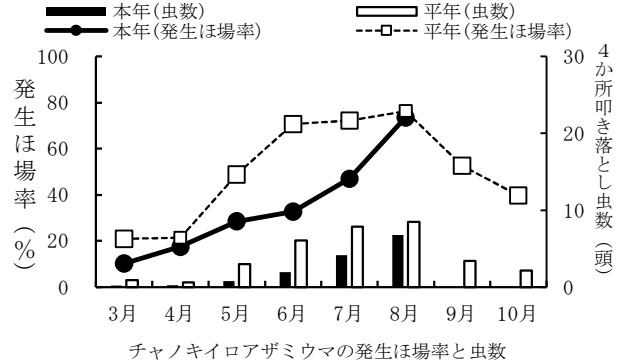
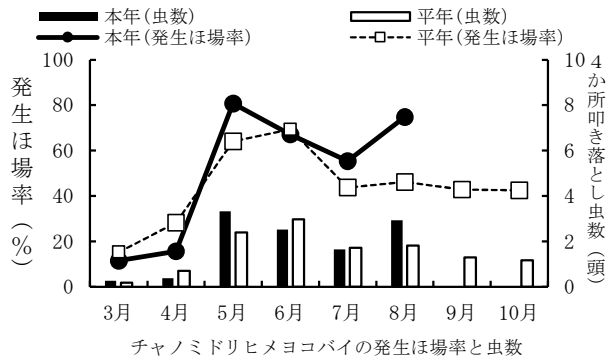
(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量
チャノミドリヒメヨコバイ 多
チャノキイロアザミウマ 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
発生量	多	並
発生ほ場率	75% (平年46%) : 高い	74% (平年76%) : 並
虫数(4か所たたき落とし)	2.9頭 (平年1.3頭) : やや多	6.8頭 (平年8.5頭) : 並



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 秋芽での被害は翌年の一番茶への影響が大きいのので秋芽萌芽～1葉期、3～4葉期の防除を徹底する。
- (イ) 晴天が続くと多発する場合がありますので注意する。特に更新園や幼木園では、新芽の伸長期間が長いので被害が継続し樹体への影響が大きい。

(7) カンザワハダニ (令和8年度技術情報第17号、8月26日付け参照)

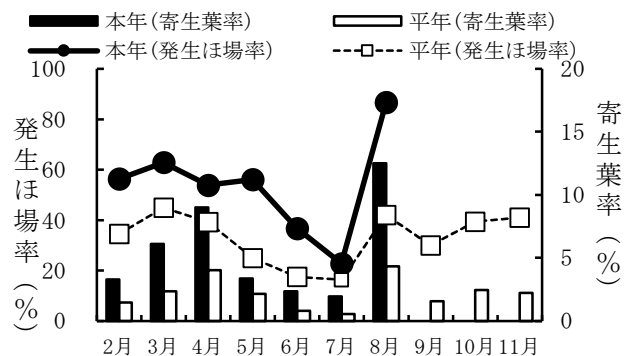


ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率 87% (平年 42%) : 高い
寄生葉率 12.5% (平年 4.3%) : 高い
発生程度の高いほ場を認めた (+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生の多いほ場では、成虫・幼若虫
・卵のいずれのステージにも効果のある殺ダニ剤で防除を行う。
- (イ) 天敵の活動が活発になる時期なので、防除する場合は天敵に影響の少ない農薬を使用する。
- (ウ) 農薬は、葉裏や裾部に薬液が十分付着するように散布する。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病虫害の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平均値を使用。